

「加曽利 B 式」の覚書

菅谷 通保（千葉市埋蔵文化財調査センター）

1 はじめに

1924（大正 13）年、東京帝国大学理学部人類学教室が実施した加曽利貝塚の発掘調査をきっかけとして、甲野勇・山内清男・八幡一郎等が用い始めた「加曽利 E 式」・「加曽利 B 式」は、「堀之内式」と共にその名称を引き継ぐ型式名が今日も用いられ、縄文時代土器型式編年研究の実質的原点と言える。

この調査の出土土器は公表されておらず、当初は人類学教室関係者の間で用いた符牒に過ぎないという見方もできる。広く共有される概念となるのは、山内清男『日本先史土器図譜』（以下『図譜』と略す）公表以降であったろう。山内は『図譜』第Ⅲ輯の解説冒頭、加曽利貝塚調査の際に、B 地点貝層の土器を基に「加曽利 B 式」を設定し、同時に指摘した「堀之内式」と「安行式」によって旧来の「薄手式」を三分したものであると述べた。設定後の経緯として堀之内式・安行式の細分と曾谷式を設定したこと、加曽利 B 式の細別に取り組んできたが「明快に指示し得ない」状況だったと述べた上で、「今仮に古い部分、中位の部分、新しい部分の三つに分けることとしよう」とした。それぞれ、加曽利 B1 式・加曽利 B2 式・加曽利 B3 式の型式名称に引き継がれるというのが今日の研究者の一般的理解で、秋田かな子は「3 細別の構想自体は『図譜』で一応の帰結をみており、この時点で各「細別型式」が単位として位置づいたと見なされる。ただ『図譜』後の言及も概して言葉少なであり、型式内容の指示はそれらを勘案したとしても十分なものではなかった」とし「こうした経過と帰着は、編年論的な共有と継承に相応の混乱を招くことになる」（2008）と述べており、筆者も同意する。加曽利貝塚の学史的評価の柱の一つである「加曽利 B 式」は、今日の縄文土器編年研究の中で、概念の共有という点に課題を残している。

2017 年 3 月に刊行した『史跡加曽利貝塚総括報告書』において、自身の型式認定上の立場を一応触れておいたが不十分なものであったし、課題もふれることができなかった。総括報告書の記述に補足する意図もあり覚書を残しておく次第である。なお、本来は研究史の詳細な記述が必要であるが、確認すべき文献の幾つかを参照できない状況にあるため、今回は見合わせる。ご容赦を乞う。

2 『日本先史土器図譜』の「加曽利 B 式」

『日本先史土器図譜』は第Ⅰ輯～第ⅩⅡ輯として、1939 年から 41 年にかけて第一期が刊行された。総数 119 葉の図版に掲載された土器は、完形土器 157 個体、破片資料 38 点に及ぶ。稀に由来不詳の資料があるが、基本的に資料の出土地（遺跡）と発掘者・所蔵者を示す方針が窺える。資料としてのまとまりを重視した（すなわち、型式として認識するに至った経緯を窺わせる）構成を意図していたと思わせる。

1967 年、再刊の際に収録された「先史土器図譜第一期完了の御挨拶」と「日本先史土器図譜（第一部 関東地方）第二期十二輯の刊行予定」には、「関東地方先史土器型式はその数甚だ多きに達し、且内に多くの変化を蔵して居り、第一期十二輯はその一斑を伝え得たとしても、決して全貌を示したとは申されません」と、十分なものでないことを述べている。「第一期十二輯には関東地方土器型式のうち次の如きものが欠けて居ります。第二期に於てこれらを極力収載します」として「加曽利 B 式の一部、曾谷式」をあげており、縄文後期に限っても、全貌を示す上での欠落があることを認めている。加えて「第一期に収

載した土器各型式の中でも、抽出した土器は甚少数に止まり、型式の全貌を明にするには尚多数の写真を必要とします。器形、装飾の重複しない限り、これらもなるべく収録したいと考えます」としているのが、山内が考えていた型式内容を示しきれていないことも認めている。現在我々に残された『図譜』とは、山内が昭和 10 年代に到達していた土器型式編年の全体的な構造を示すことを目的に編まれたものであるが、テキストには幾つかの段落（型式）が欠落し、各段落中の記述が不足しているということである。

『図譜』刊行当時の山内の土器型式編年が、広い視野のもと群を抜いて精緻に組み立てられたと多くが認めるからこそ、研究者は図版に示された土器 1 点 1 点の吟味、解説文の精読や「行間を読む」努力によって、山内の示した型式の共有に努めてきたのである。当然のことだが、山内が今日我々の手元にある膨大な資料を見通していた筈もない。多少の自戒を含めて述べるならば、『図譜』掲載土器相互の系統性や装飾の変化に関する山内の解釈や見通しは、我々の視点から検証し必要があれば見直さねばならないものであり、逆に山内のテキストに当てはめて現在の資料を解釈することは慎むべきである。心がけるべきは型式設定がどのような事実に立脚していたかを知ることにある。型式編年を構築していく上で利用できた土器がどれほどあって、その土器の由来と出土状況はどうであったのか、完全な解明は不可能であるが、接近する営為は継続していかなければならない。

ここで本題に戻れば、『図譜』での関東地方縄文後期編年のテキストには、欠落が二つ（加曽利 B 式の一部、曾谷式）連続していることに加え、その直前の型式（＝加曽利 B 式中位の古さ）の記述不足をどの程度見積もるかによって、更に直前の型式（＝加曽利 B 式古い部分）の解釈が分かれている。この点の筆者の立場表明に先立って、欠落部分前後の『図譜』の内容を確認しておく。

第三輯 加曽利 B 式（古い部分） 解説では、「加曽利 B 式の古い部分は堀之内式新型式に近似し、種々の形態装飾を有して居る」として、その内容を「比較的粗製」の土器（以下粗製土器とする）と「稍精製」の土器（以下精製土器とする）に分けて説明している。粗製土器は外面に縄紋のみ或いはその上に条線を加えるもので深鉢形と鉢形があり、精製土器は器面が滑沢で磨消縄文による装飾を持ち器形が多様であると説明する。

図版は 20 ～ 29 の 10 図版・17 個体で構成されている。旧国名別で見ると、常陸 9 個体・下総 4 個体・東京市を含めた武蔵 4 個体で、常陸が過半を占める。遺跡別では、常陸の廻戸貝塚（茨城県稲敷郡阿見町）6 個体・福田貝塚（茨城県稲敷市）2 個体・椎塚貝塚（茨城県稲敷市）1 個体、下総の中妻貝塚（茨城県取手市）2 個体・良文貝塚（千葉県香取市）と矢作貝塚（千葉県千葉市中央区）各 1 個体、武蔵の高田貝塚（神奈川県横浜市港北区）2 個体・馬込貝塚（東京都太田区）と権現台貝塚（東京都品川区）各 1 個体である。遺跡として廻戸貝塚の 6 個体が突出している。

第四輯 加曽利 B 式（中位の古さ） 解説では「新しい部分」や曾谷式・安行式前半に向けての「中位の古さ」からの変化を説明する記述が中心である。粗製土器は頸部の彎曲や口縁外面等の隆線によって「古い部分」との違いを示し、「曾谷式及び安行 1 式にまで続く形態装飾である」としているが、後述の精製土器の記述を勘案すると「中位の古さ」と「新しい部分」両方にかかる説明と受け取れる。精製土器の「中位の古さ」は、皿や浅鉢の底部に丸底や台付が見られるようになることに「古い部分」との違いを示し、深鉢形に底の甚だ小さなものは少ない点に「新しい部分」以降との違いを示す。体部の磨消縄文による装飾について、平行線化したものが少なくなると「古い部分」と比べた違いを述べるが、どう「性質が変わってくる」のかは示していない。一方「斜線を加えた特有の文様帯」の存在が「中位の古さ」の一つの特

徴と強調している。「新しい部分」について、丸底の皿と小形の底部で頸の分立した深鉢形を指示して器形の特徴を示し、装飾について「帯状又は弧線」による磨消縄文が中心であるとした上で、「曾谷式及安行式前半に続く幾多の器形装飾の胚胎を見る」と概括している。

図版は30～39の10図版・19個体で構成され、全て下総の資料で、遠部台遺跡（千葉県佐倉市）11個体・江原台遺跡（千葉県佐倉市）6個体・立木貝塚（茨城県北相馬郡利根町）1個体・加曽利貝塚（千葉市）1個体である。粗製土器は33図版2個体のみだが、個別解説に「1は正確に加曽利B中型式であるが、2は新型式に属するかも知れない」と記載がある。他は「斜線を加えた特有の文様帯」として指示された30～32・34～36の各図版、図版37は大形広口壺、図版38は「紐を通す孔」のある突起が五ヶ所に付く筒形の土器である。

第七輯 安行式土器（前半） 解説で、第三輯同様「薄手式」の細別として指摘されたと述べている。安行式細別の経緯の部分は割愛するが、「安行1式はその直前の型式即ち曾谷式と甚だ近似し、相互に区別し得ないものを含んで居るし、加曽利B式以来の伝統的な器形或いは装飾も幾分続いて居る。土器は稍粗製の60、61の如きものが半数近くを占めて居る。これは加曽利B式のうち33の如きものの伝統である」と、粗製土器の第四輯解説に対応する土器を示している。精製土器について「深鉢形、浅鉢形、皿形、注口付土器その他の変化があり、同じ深鉢形にも例えば62、63の如き種々の規範がある。これらも多くは曾谷式と相通ずるものである。精製土器の装飾は色々あるが、磨消縄文の手法が用いられ、特に口縁外側から頸部にかけて何重かの縄紋の帯が加えられ、その中に小形の瘤が配置されるものが多い。これは安行1、2に通して見られる特色であり、又曾谷式まで遡りうるのである」として、器形と装飾に関して曾谷式に起源を持つ（翻せば加曽利B式には遡らない）要素を指摘している。欠落した型式の具体的な特徴について、『図譜』での数少ない言及である。

図版は61～69の10図版、15個体で構成される。安行1式は60～66の7図版、12個体で、内訳は下総9個体で遠部台遺跡の貝塚地点5個体・岩井貝塚（千葉県柏市）3個体・横橋貝塚（千葉県千葉市）1個体、常陸3個体は椎塚貝塚2個体・広畑貝塚（茨城県稲敷市）1個体である。

3 資料選択についての解釈

前項で概観したように、第三輯・第四輯と第七輯の安行1式とされた掲載資料では常陸・下総が多く、遺跡としては、第三輯の廻戸貝塚、第四輯と第七輯の遠部台遺跡が群を抜いており、第四輯の江原台遺跡と第七輯の岩井貝塚がこれに次ぐ。各輯で例示された粗製土器は、第三輯の4個体全てが廻戸貝塚、第四輯では遠部台遺跡と江原台遺跡から1個体ずつ、第七輯では岩井貝塚2個体と遠部台遺跡1個体の他、広畑貝塚1個体がある。広畑貝塚を除くと各輯で精製土器を複数掲載した遺跡の資料を用いている。

廻戸貝塚 東京大学理学部人類学教室の加曽利貝塚調査と同じ1924年に、同大文学部考古学教室が発掘した遺跡であるが、1996年の「第9回縄文セミナー」で斎藤弘道が調査報告書の内容を紹介する（斎藤1996）まで、土器の出土状態等の詳細について研究者の多くには知られていなかった。出土状況について1931年発行の『考古図編 第五号』に記述があるが、今回は原本を参照できなかったため、斎藤の記述を引用する。「発掘調査により出土したものである。所収資料は9個体（浅鉢、鉢、深鉢、壺）で、表土下1尺（約30センチ）に2尺（約60センチ）の貝層があり、その下から検出された厚さ1尺5寸（約45センチ）径8寸（約24センチ）の播鉢状をなす炉址の灰層中及びその周囲から直立ないしは横倒して

出土したものである」。9 個体の完形土器写真が掲載されているが、第 1 図 29 - 1 が見当たらない一方で、3 本の沈線による横帯文を持つ浅鉢形土器、「の」の字状単位文と多段化した細い横帯文で装飾する鉢形土器、多段化した細い横帯紋 3 帯と横に連続する半円状モチーフ内に弧線や円を加えた磨消縄文を持つ壺形土器、最大径を同下半に持ち口縁に向けて直線的にすぼまる無頸壺のような土器の 4 点がある。

廻戸貝塚資料の検出状況を良好と判断したからこそ、山内は『図譜』に 6 個体を掲載し、また粗製土器の例にしたと評価したい。筆者は古い部分は廻戸貝塚を中核として構成されたと考えている。

遠部台遺跡 史前学研究所が 1932 年に発掘調査し、池上啓介が報告（1937）している。江原台遺跡の状況も窺える部分があるので、やや長いが以下に引用する。「遺跡は印旛沼の南岸にして、臼井町停車場の東方約二軒の地点にある洪積台上にある。此の洪積台の台上は平坦且つ広大にして、小字江原台と称する所に小貝塚を伴う大包含地あり、又小字遠部と称する所には、小貝塚が点々として数ヶ所に存し、その間は包含地があつて、一大遺跡群をなしている。今回発掘した地点は遠部にある貝塚群の三貝塚と包含地の一部である」。「此の台上の二つの遺跡中、江原台の方は従来多くの資料が発見せられ、諸所に於いて貴重な資料を所蔵せられている。（略）昨年秋、明治大学史学部員の発掘があり、多数の資料を得られた由」。

史前学研究所の発掘は、包蔵地 1 箇所を東西 5 m、南北 4 m の範囲、貝塚は 3 か所あるうち 1 か所の約 4 m 平方の範囲を主に、他の貝塚も二坪ほど試掘程度に掘ったとある。

包蔵地の状況は「表面より約三〇糎の所から約五〇糎の厚さに之亦夥しい土器片が層状をなして発見せられた。此の土器層の下部は黒色土で厚さは一定しないが約四〇糎あつてロームに達する此の土器の層状をなす部分を東南に五米、南北に四米を発掘した。此の結果、土器片約一万二千余片の多量を得た。（略）此等の土器片は層状をなして発見せられるのみで、何等其間に層位的な事実を見ない」。「茲に注目を要する点は、（略）此の地点より発掘した土器は器形、紋様、大いさに於いて類似したものが多い点である。即ち一万二千余片の土器を器形紋様等により分類すると簡単に大約五種類に分けられる。而して量から見ると此の中の三種類のものが最も多い」と記されている。

「第一類」～「第五類」に分類された土器の特徴をつぎに見ておく。「第一類」は「口縁部の稍々外反する大形の甕形を呈し（略）底部の比較的小さい不安定な土器である。普通口縁部及び頸部に各一本の紐状隆起縁線を廻らしている。又器全体に粗目の縄文が施されている」。掲載された土器片写真には縄文施文のみと、その上から比較的疎らに沈線を加えているものがある。「第二類」は「最も特徴とする点は、装飾文様であり、縄紋が全くないことである。即ち平行線文が、横に或いは斜に施紋せられている事であつて、此の線刻は極めて美しく、而も鋭く、明確なものが多い」とされ、器形が多様なことを強調している。「第三類」は「大形の壺形を呈し、直口で学生服の襟状の口縁を有し、肩が円く張り出した背の高い土器である。（略）装飾紋は口縁部に三條乃至五條の平行線を廻らし、その間は篋磨きが行われている。此の平行線は更に縦に波状線を置いて装飾の効果を挙げている。又此の平行線紋の他に縄状隆起線紋が数條横走したものや、弧状なしたものがあり、此の隆起線の間には沈線を以って巧みに充めているものもある。肩以下の部は縄蓆紋のみで特別の装飾はない」。「第四類」は「深鉢状を呈するのみで器形の変化はない。（略）斜行線が反対の方向から相互に交叉して竹矢来状の文様が口縁部から底部近くまで施されている。而して、頸部に幅約三糎程の無紋帯が二條の横線に画されているものが普通である。（略）縄蓆紋は地紋として辛じて認められるけれども、（略）注意しないと見失う程になっている」。「第五類」は「大形深鉢の器形を呈す。厚手作りで、その装飾紋様直は線曲線に画された縄紋とその磨消の手法によって、器全体に大胆な大

形の装飾紋を有するものである」と説明されているが、掲載写真から判断すると、曲線的な描線を多用する東北的な入り組み文と、数帯の縄紋帯に垂下する蛇行沈線を組み合わせるもの等がある他、体部ソロバン玉状深鉢の肩部と思われる破片（（大塚 1983）が指摘した）などがまとめられている。他に異形土器として舟形を呈するらしき片口土器、吊手土器（ほぼ同形のもの1個体は図示されていない）、異形台付土器、底部から口縁までほぼ器壁が直立する器高の低い鉢形の土器で「つ」の字状磨消縄紋を持つ土器を図示している。片口土器・異形台付土器・鉢形の土器については土器層中の出土であると特記されている。

貝塚の状況は、「各貝塚の表面は貝殻の撒布多からず、其の面積は約二〇米の長軸を見るに過ぎない。何れも表土約二〇糎あり、その下部に貝層が一〇糎より二〇糎の層状をなして存在す。その下部は黒色土約三〇糎ありてロームに達する。（略）遺物特に土器片は貝層中に出土するけれども、その多くは貝層下の黒色土中に発見された」。「各貝塚は相互に約三〇米内外の近距離にあり、貝層の状況、遺物の出土状態、及び遺物上からも殆ど同様であり、その間に特別の差違が発見せられなかったから、此等の貝塚の出土遺物を一括して記述する事にする」としているが、三貝塚の時期が全く同じとは限らないので、この点は残念なことであった。

貝塚出土の土器として「第六類」・「第七類」を示している。「第六類」は、「第一類土器と器形においては殆ど同一であるが、第一類に比し略小形で、より薄手の甕形土器である。本類の最も特徴とする点は地紋である縄蓆紋を全く有しない事と、斜行線紋が、口縁及び、胴部底部にかけて発達している事である。又口縁部及び頸部には、紐状隆起線が第一類土器と同様に発達しているが、或る場合には、爪形状に隆起線を刻んでいるものもあり、又点刻を加えたものもある」としており、4点を器形復元できたという。報告に写真が掲載された2点は貝層下の黒色土中出土とされている。「第七類」は「一般に精製であって、器形の変化が多い。（略）装飾としては口縁部の帯状縄紋をはじめ、頸部胴部に磨消縄紋の手法が加えられ、入組曲線紋、弧線紋等により複雑な紋様を有するものが多い。帯状縄紋は口縁から頸部にかけて二條乃至三條の縄紋を残し、之に横線を副えて、線の中間の縄紋を深く磨消して略浮彫状を呈したものである。又この帯状縄紋の結節部には瘤状の小突起を置いている」としている。示された写真や拓本中には他時期の混入がかなりあるが、全体として見ると安行1式の精製土器が遺存状態が良く数も多い。池上は「第六類第七類の土器は包含地の発掘においては全く発見しなかった」としている。

器形復元土器の写真が、「第二類」12個体、「第三類」1個体、「第六類」2個体、「第七類」3個体を掲載している。『図譜』掲載資料と対比すると、第2図では31-1=報告6図5、32-1=報告7図5、34-2=報告6図6、35-1=報告6図2、36-2=報告7図1、37=報告9図、39-1=報告7図2の7個体。第3図では60-2=報告20図5、64-1=報告20図3、65=報告20図2、66-2=報告20図1の4個体である。第2図30-1・32-2・33-2・35-2の4個体、第3図64-3が報告の掲載が確認できない。対比できた個体の写真を相互に比較すると、『図譜』掲載写真は欠損部を埋めた充填材が白く見えるが、報告掲載写真は欠損部分の見分けが難しく充填材の上から着色していると思われる。

岩井貝塚 大町四郎・片倉修によって1933年以降継続的に発掘及び踏査が行われていて、（大町・片倉 1937）で報告された。遺跡の状況を以下に引用する。「手賀沼南岸に注ぐ小川の支流の最奥部に當り、東北に向かって緩い傾斜をもってこの谷に臨むローム層の台地上にある。大体8個の小貝塚からなっているがその配列をみると、東北に向かう緩斜面に面して大体半円状に配列されている」。（略）「各地点の貝

層は単一であって、貝層間に土層を持ち、上下層に分れる様なことはなかった。又貝層は密に堆積することなく、土を混じて居る様に見受けられた。その厚さも地点によって不定であるが、厚い所でも 50 cm を超える所は無い。貝層下土層も一般に 30 cm 内外である。「各小貝塚共貝層下土層には全然安行式土器が発見されず、加曽利 B 式及少量の堀之内式土器が出土した。貝層中には加曽利 B 式又は安行式が存在した」。

土器の出土傾向を要約すると、加曽利 B 式は安行式に次いで多量に出土し、貝層下土層発見の土器の大多数を占める他、貝層中からの出土が多い貝塚もあった。安行式は主として貝層から出土して貝層下土層からは殆ど見られない。安行 2 式は「覆土（貝層を覆う土層の意味か？引用者注記）」発見のものが多く、表面採集資料でも比較的多く、貝層中から大量に出土する貝塚もある。

器形復元された土器写真 8 点が図版に掲載されており第 3 図 61 - 2 = 報告 1、63 = 3 報告と確認できる。61 - 1 は恐らく報告 2 であろうが、写真正面の位置がかなり違うらしく確実ではない。

廻戸貝塚資料の一括性について、斎藤は含みを持たせている（縄文セミナーの会 1996 b）が、竪穴住居址の炉跡中と周辺の床面からの完形品の出土を思わせる状況と言えようし、土器群より上に厚さ 60 cm もの貝層が堆積していたことも併せると、一括性の高い資料と評価して良い。遠部台遺跡は 200m 程しか離れていない包含地調査地点と貝塚調査地点によって、加曽利 B 式（中位の古さ）と安行 1 式を時間的前後関係と捉えられる遺跡である。岩井貝塚はそもそも山内が安行 1 式設定の根拠とした資料で、大町・片倉の報告からは堀之内式・加曽利 B 式と安行 1 式の前後関係を示す状況であることが確認できる。以上のように一括性の高い土器群の確認や、層位と地点から土器群の独立性を説明できる事例を積み重ねることが、山内の型式設定と編年構築の基本であろう。更に、加曽利 B 式（古い部分）が常陸、加曽利 B 式（中位の古さ）と安行 1 式が下総を中心に構成されていることに加え、曾谷式設定の根拠は下総の曾谷貝塚であることから、山内が第二期刊行も含めて『日本先史土器図譜』として提示しようとしていた関東土器型式の編年的組織のうち、少なくとも後期中葉から後葉にかけては、常陸・下総といった東関東の土器の出土状況や層位的所見があきらかな遺跡を用いていたと想定する。『図譜』第Ⅲ輯・第Ⅳ輯・第Ⅶ輯で、掲載数が多いにもかかわらず、地域的な差異が著しい粗製土器の説明に多くを割いて、連続的な変遷として説明していることは、この推測を裏付けるだろう。

これによって『図譜』という不完全なテキストの、縄文時代後期という章中の段落の欠落（加曽利 B 式新しい部分）を説明するため用意していた可能性の高い資料を探索する条件が絞られる。1941 年に、『図譜』第ⅩⅠ輯・第ⅩⅡ輯に先立って記された「先史土器図譜第一期完了の御挨拶」・「日本先史土器図譜（第一部 関東地方）第二期十二輯の刊行予定」で、第二期刊行開始を昭和 16 年 9 月に予定し、「第二期は力めて一月一輯の割に発行したい」としていることから、この時点で第二期の図版に用いる土器の選定と写真撮影の大半は終えていた筈である。従って 1941 年以前に主要な土器が写真撮影可能な状態（接合・復元がなされている）であった常陸か下総の遺跡と限定でき、層位又は地点毎の状況などによって、加曽利 B 式（中位の古さ）や曾谷式又は安行 1 式との分離の説明、あるいは前後関係の証明が可能な条件を備えていることが望ましく、器形復元できた粗製土器があることが望ましい。

いち早く鈴木（1980）が指摘したように、史前学研究所が 1931 年に発掘し池上啓介が報告（1933）した、常陸の広畑貝塚（茨城県稲敷市）は以上の条件をすべて備えている。既に『図譜』第Ⅶ輯に 1 個体（第 3 図 60 - 1）を掲載しているので、他の個体も撮影済みであった可能性が極めて高い。池上の報告から調査の状況と土器の出土状態をまとめておく。清野謙次の明治 41 年発掘地点南方に東西 4m × 南北 2m の

調査区を設定したもので、2m30cm ほど掘り下げた。上から、黒色の砂土が混じる第一貝層（＝第三文化層）約 80cm、黒褐色の砂土が若干混じる第二貝層（＝第二文化層）約 65cm、二枚貝を主とする貝殻が細かく破碎され「堅く踏み固められたる如くなった」第三貝層（＝第一文化層）約 45cm があり、黒褐色の砂土層約 10cm、その下は黄褐色の砂土となる。第一貝層と第二貝層は最大 15cm の層状の灰が間層になっていて、第二貝層と第三貝層は破碎の有無によって明瞭に区別できた。以上の層での遺物は各層のそれぞれ上部に集中することが、報告の fig.5（貝層層位図）と記述で示されている。尚、池上報告は貝層としての記述を上から下に第一～第三貝層、文化層としての記述を下から上に第一～第三文化層としているので注意されたい。筆者はこれを取り違え、遺跡の評価を誤解していた期間がある。

最下層の第一文化層（第三貝層）の出土土器は「完全土器」4 個体（報告図版 7 に完形に復元された精製土器 2 個体と粗製土器 2 個体が掲載されている。本文は 1～4 の番号を付して記述しているが、図版では番号が欠けている。本文の説明内容から、個体を特定し、本稿第 4 図左側に配列した）口縁部破片 55 点（底部・胴部破片についても点数を挙げているが割愛する）で、第一類と第二類に分類している。記述は形態の特徴が主で、波状縁と平縁とで分類したかのようにも読めるが、夫々を写真で示した内容から実質的に第一類＝精製土器、第二類＝粗製土器となっている。胴部破片については「櫛目紋が最も多く、縄蓆紋が甚だ少ない」と記述しているが、精製土器体部の主に横走る平行沈線文と、粗製土器の口縁から体部にかけての斜行する沈線文を区別せず、共に「櫛目紋」としているようである。底部については底径 4cm 以内で不安定なもの 5 点、底径 7cm 以上でやや安定の良いもの 3 点としている。

中層の第二文化層（第二貝層）の出土土器は、接合して全形の判るもの 4 個体（具体的な指示はないが fig.21 の実測図 4 点と思われる。本稿第 5 図左 2～5）、口縁部破片 130 余りという。第一類に相当するものは第一文化層では「櫛目紋」が主であったのに対して、第二文化層では曲線的な描線を用いた磨消縄紋での装飾が多いとしている。第二類については第一文化層出土のものと区別ができなかったようであるが、出土土器全体に対して量的な増加が認められるという。第一文化層に無かった土器として第三類・第四類・第五類を抽出している。第三類は、「第一文化層土器群に皆無の土器片である。（略）口辺に二條乃至四條の直線を廻し而して、口辺部直上に数個の小突起状の意匠を有する他に特別の装飾紋は見られない。土器口辺部の上半の大破片一個破片二十二個を有し、本土器群中数量的に第三位を占める」と説明している。第四類は「口縁部に発達せる紋様帯は所謂隆起帯状縄紋にして、紋様帯以外の部分を削剥する為紋様は少々立体化する。而して此の縄紋の結節部には二個のつまみ状の突起を置いている。胴部から底部にかけて横に櫛目紋によりて意匠せられている」としている。「朝顔鉢状大形土器」1 点が接合の結果復元された他口縁部破片 10 片がある。復元個体は本稿第 5 図左 5 が相当するだろう。第 5 図右下段には 13 片あって報告文の数字と合わないが、口縁部に隆起帯縄紋があるらしい破片は 9 点ある。第五類は「口径の広い比較的浅い器形を有し、口縁部は少々内曲するを特徴とし全くの無紋にして色調黒漆色を呈するのが普通」とある。「少々完形なる大形なる鉢形土器」1 点と破片 8 点があるとされている。今回掲載を見送ったが報告の fig.18（第五類土器）には 14 点が掲載されており、これも記述と合わない。他に異形土器として「主体部二段にくびれ、各々に相向弧線を引き縄紋を詰めしものあり。而して弧の接合部に疣状突起を置けるものにして、所謂遮光器紋様とでも云う本貝塚には特殊な紋様の土器片」として第 5 図左 1 を示し、他に「椀形小土器破片、皿形土器破片数個出土」がある（報告 fig.23 と思われるが本稿未掲載）。

最上層である第三文化層（第一貝層）は、「縄紋式土器に弥生式土器の混在を見る遺物層」で「貝層上部は後世の攪乱を受けた事が明白」とされる。出土した縄文土器について「第二文化層の土器群と相類似するも、紋様意匠上に変化が見られる。即ち所謂真福寺式土器或いは安行式土器の紋様に類似するものを相當に発見」として報告 fig.20 を指示、完形土器として fig.22 の 2・3 を指示している（本稿未掲載）。

広畑報告に掲載された土器は、以上言及の他 fig.22 に 1 点、fig.23 に 2 点があり、これらは出土層位が確定できない。また、破片の集合写真では fig.20 のキャプションのみ第三文化層第一類土器とある他は層位の指示がなく、fig.17 と fig.18 にはそれぞれ第二文化層出土として記載がある以上の点数が掲載されていることから、他の文化層出土の個体が含まれているか、池上の分類以外の破片が含まれているとも思える。また fig.21 掲載の実測図 4 点（第 5 図左 2～5）は、4 が第二文化層第五類で言及された「接合の結果少々完形なる大形なる鉢形土器一個」、先述したように 5 が第二文化層第四類の復元個体とすると、他 2 個体も第二文化層出土土器である可能性が考えられる。以上の概観から、本稿第 4 図が第一文化層、第 5 図が第二文化層の内容を反映していると考えておく。

第 5 図左 5 と同図右下段の大部分は「口縁外側から頸部にかけて何重かの縄紋の帯が加えられ、その中に小形の瘤が配置される」と山内が説明する第 3 図 62～64 に相当する。一方第 5 図右上段は、口頸部装飾に明瞭な隆起帯縄紋はなく、貼瘤の幅が狭く一段のみであるなど、安行 1 式と似て異なる土器が主体を占める。第 5 図左 1 は「遮光器紋」を持つ瓢形土器で、口縁部の装飾は隆起帯化していないようである。同 2 は縄紋施文の碗形の体部に外反気味で長い無紋の口頸部が付く土器で、体部と頸部は刺突又は刻み列で区画するようである。同 3 は丸底で体部中程に最大径を持つ鉢形の土器で、短い口唇部が外折し装飾は幅広の縄紋帯である。以上は山内資料の曾谷貝塚や、筆者が曾谷式と考えている曾谷貝塚 20 地点 4 号住居址に類似した資料を指摘できる。この点から広畑貝塚の第二文化層は、曾谷式から安行 1 式にかけてのまとまりであり、下層の第一文化層は第 4 図によって示される土器群が、第 5 図に相当する土器を含まない状態で出土したと理解できる。第 4 図左 3 の粗製土器が、山内が「新形式かもしれない」とした第 2 図 33-2 と、頸部の紐線文の有無を別にすれば良く似ていることも示唆的である。以上、史前学研究所調査の広畑貝塚第一文化層が、山内の加曾利 B 式（新しい部分）に相当するならば、第二文化層との層位的な関係も併せて、『図譜』第二期刊行のため用意されていた可能性がきわめて高いだろう。

広畑貝塚は加曾利 B 式（新しい部分）の、曾谷式・安行 1 式に対する独立と、前後関係を層位的に確認できる遺跡であった。関東地方の後期編年の枠組みを整備する上で、重要な役割を果たしたと考えて大過なからう。山内自身の調査によって曾谷式が独立した単位となった後には、層位的関係は曾谷式にも及ぶわけである。第二期の曾谷式図版に第二文化層の出土土器が用意されていた可能性も十分考えられる。

ただし、池上報告の広畑貝塚だけでは、10 葉の図版を構成するには著しく不足しているので、他にも加曾利 B 式（新しい部分）のために用意していた資料があったはずである。もちろん、明治期以来の常陸・上総の遺跡から採集・発掘された土器は、当時既に大量であって、人類学教室や史前学研究所以外に、個人収集家の所蔵品もおびただしい数であったろうから、個人蔵資料も数個体程度は選択された可能性を否定できない。しかし、第 IV 輯解説末尾に遠部台遺跡だけでなく、江原台遺跡の名を挙げて「掲載し得たのは幸いであった」とまで記載した山内の意図が何処にあったのかと考えると、（菅谷 2000）に述べたような江原台遺跡資料の状況から、同遺跡もまた第二期の「加曾利 B 式の一部」の選択対象であったと思われる。広畑は（新しい部分）から曾谷式・安行 1 式へという関係は示しているが、（中位の部分）と（新しい部分）

の関係については判断の根拠とならない。遠部台遺跡に近接する江原台遺跡の存在は（中位の古さ）と（新しい部分）の時間的な近接を、層位はともかく地点の近接と土器の近似によって示すことを可能にすると考えている。以上が、筆者の考えるテキストの欠落した章＝加曽利B式（新しい部分）と曾谷式の手掛かりである。

さて、第二期に予告された「加曽利B式の一部」は、上に述べた（新しい部分）で全てだったろうか。鈴木（1980）の「加曽利B 1－2式」の提唱は、第Ⅲ輯と第Ⅳ輯の揭示資料の間に、粗製土器以外の脈絡が見出したいという問題を浮かび上がらせた。鈴木が同式とした内の多くを占める、頸部が括れる器形や、弧状描線を横位に連携する磨消縄文の装飾などが特徴的な土器群、あるいは体部中程に帯状縄紋を数帯重ねて垂下する蛇行沈線や対弧文を加える土器群などは、一括性の良好な資料からみる限り（古い部分）（中位の古さ）の何れとも明確な共伴関係が見出せず、一方遺跡単位で見ると各々と同じ遺跡で出土する事例が多い。こうした土器が『図譜』以前に知られていたことは、大森貝塚（E.S. モース著 近藤・佐原編訳 1987）や史前学研究所の報告した加曽利貝塚資料（大山史前学研究所 1937）中に復元個体を見出せるので利用可能であったが、『図譜』第Ⅲ輯・第Ⅳ輯には揭示されていない。一方、奈良国立文化財研究所の保管する山内資料のうち「外に「加曽利B式」とラベルが貼付してあった」「学生だった戸田哲也氏が、B 1式～B 3式まで含むので勉強するように、と博士に云」われた資料中（金子裕之編 1998）に、数は少なくとも見出せる（第6図）ので、山内が「加曽利B式」という範疇の中で考えていた証拠がある。広畑貝塚にこうした土器が全く見られないので（新しい部分）以降でないのだから、山内がこれらの土器を（古い部分）・（中位の古さ）いずれかを補う形で、用いようとしていた可能性を考えるのであるが、それはどちらの補足としてであったろうか。（古い部分）と（中位の古さ）の解説を比較するなら、補うべき内容が残されているのは「全体の構成を示すことが出来なかった」とわざわざ断りを入れている（中位の古さ）と理解するのが当然と考えている。鈴木「加曽利B 1－2式」の大半は上で問題とした土器群であり、（古い部分）と（中位の古さ）の間に位置付けたことを評価するが、（古い部分）の細分という設定であることに加え、第1図21と共に、20の廻戸貝塚資料を他から分離している点に同意できないので、有効な概念にならないと考える。また（山内 1964）では大森貝塚について「特に加曽利B 2式が最も多く、他に少量加曽利B 1式、安行1式、安行3式等がある」としており、問題の土器を加曽利B 1式に含めた場合少量とは言いがたいとの印象を持っている。このことから問題の土器は（中位の古さ）に含まれ、加曽利B 2式と理解するのが筆者の立場である。

4 東関東の加曽利B 2式・加曽利B 3式

縄文時代後期の中葉を、加曽利B 1式・加曽利B 2式・加曽利B 3式という三型式の枠組みで捉える上での筆者の基本的な考えを、前項に説明した。

加曽利B 1式について、筆者はかつて精製深鉢形土器が外面体部の帯状施文域に単位性が生じていく一方、口縁部内面文様が衰退していくと捉えて、最古～新の四段階を考えたことがある。今から見ると多分に鈴木（1981）の変遷観の影響下にあったが、その後20年余り仮説に合致する層位層位や遺構一括資料は見出せていない。古・新二段階程度で、型式を構成する多様な土器群の多くに適用できる細分を考え直しつつあるが、ここでは未だ検討途中であることのみ明かしておく。

『図譜』第Ⅵ輯「堀之内式」の51図版に、第1図28や29－1・2に類似した土器がありながら精粗の

別に言及していないので、粗製土器と精製土器という対比的な土器群が組み合って型式を構成する構造を、山内は加曽利 B 1 式以降と考えていた節がある。「加曽利 B 式」内部の地域差の発現には、粗製土器の位置を占める土器の出自が地域によって異なるという事情と、大容量で規格性の高い深鉢形土器が大量に生産・消費される傾向が次第に顕著になっていくこと、その間に別の出自の土器群が参画する場合があることを主要な要因と想定する。精製土器でも出自の異なると思われる土器群の参画と量的増加が地域性の発現を招いたと見なせるが、それがくりかえし生じたのが加曽利 B 2 式と考えている。

東関東の加曽利 B 2 式精製土器は、①加曽利 B 1 式精製土器に系譜する外面を丁寧な磨きで仕上げ、磨消縄文の装飾範囲が比較的狭い土器群、②口頸部と体下半部にも縄紋施文し、胴部の装飾が横方向に展開する磨消部の少ない土器群、③遠部包蔵地や江原台遺跡の資料を用いて山内が示した「斜線を加えた特有の文様帯」を持つ土器群がある。以上三つの土器群は、深鉢や浅鉢など多様な器種に共通した装飾を行う点で、(秋田 1998) の「共揃え」の関係を持っている。後述のように加曽利 B 3 式には③の遺制を窺わせる土器が一定数認められ②の要素は残らないので、②と③の盛期は異なり前後すると見る。①の土器群は、②と共伴して数的には過半を占める場合がある一方で③との共伴は殆ど無いので、東関東では徐々に衰退していくと見る。①主体で②の伴う一括資料として千葉県船橋市古作貝塚 2 号 pit (第 7 図)、③主体の一括資料として遠部台包蔵地土器層があり、これを基に加曽利 B 2 式の古段階・新段階を考えている。

②の土器群には、加曽利 B 1 式期の①土器群から系統的に発生する要素を見出せない。大塚達郎が②土器群が加曽利 B 1 式期まで遡上する可能性を指摘した鬼越貝塚例 (第 10 図 2) と、岩手県萩内遺跡の口頸部と体下半に縄紋施文し体上部に第 1 図 20 の入組文に類似する装飾を持つ口頸部が直線的に外反する深鉢形土器 (第 10 図 1) など大湯式や十腰内 I 式から発展すると思われる土器群が、口頸部が装飾域として独立していて体上部に磨消縄文が発達する点で共通することから、加曽利 B 1 式期の東関東に東北地方の土器群との関係性で生じた土器があり、加曽利 B 2 式期に「共揃え」構造を持って盛行したという可能性を考えている。

③土器群も①・②土器群からの系統的発展を考え難いが、深鉢形土器に関しては、器形や装飾する部位の類似することで、祖型の可能性を指摘できる土器 (第 10 図 4) がある。無紋の口縁部が大きく開き体部下半から底部が円筒状を呈する深鉢形土器の独特の器形と、体上部に広い装飾域を持つ構成は、手稻式・宝ヶ峯式・川原式 (第 10 図 3) など北海道から東北南部まで広域に存在する土器群とも共通するので、やはり東北方面との関係性で生じた土器から発展し、斜線文様による「共揃え」構造を獲得するという経緯で考えている。斜線文様自体、上記広域に存在する土器群中に類似の装飾が一定数存在する。

以上のように、遠方の異型式との関連で生じた土器群の盛衰によって、加曽利 B 1 式以来の精製土器群が主体である中部・西関東方面と著しい差異を生じさせるのが、東関東の加曽利 B 2 式と考えている。加曽利 B 3 式は、千葉縣市原市に所在する祇園原貝塚と西広貝塚の調査によって、遺構一括資料に基づいた古新の判別が可能であるため、第 8 図・9 図を利用して説明する。第 8 図はおおよそ粗製土器、第 9 図は精製土器で構成していて、縦線左側 (古段階) が祇園原貝塚 50 号住居址、右側 (新段階) が西広貝塚 58 号住居址である。加曽利 B 2 式との区別や古段階と新段階の変化要素については (菅谷 2012) を参照したいが、「磨消縄文は帯状又は弧線を中心としたものを主とする」との説明によく一致するだろう。

加曽利 B 2 式からの脈絡が辿りづらい土器として、23～29 の「頸の分立した底の小形な」精製深鉢形土器と、38・39・42～44 の磨消縄紋を主とする帯状装飾の浅鉢が注意される。深鉢形土器については

東北地方の瘤付土器成立直前に位置付けられる土器群と器形と文様構成が類似しているが、東北の土器群の磨消縄紋が「上下起点終点型」（大塚 1995）であるのに対し、加曽利B 3式では横位展開する点が異なっている。浅鉢については対応するものが東北地方に存在するか確認できないているが、やはり横位展開する帯状縄紋が装飾の主体を占めることから、深鉢形土器の「共揃え」として新たに成立したと考えておく。加曽利B 3式を特徴付ける精製土器は、やはり東北地方の土器群との関係性の中で成立したものであろう。一方粗製土器は、加曽利B 1式以前からの系譜を辿れる1～9に加え、遠部包蔵地第四類に系譜する10～17が参画してくるようであり、共に曾谷式をへて安行1式以降にも続いていくのである。

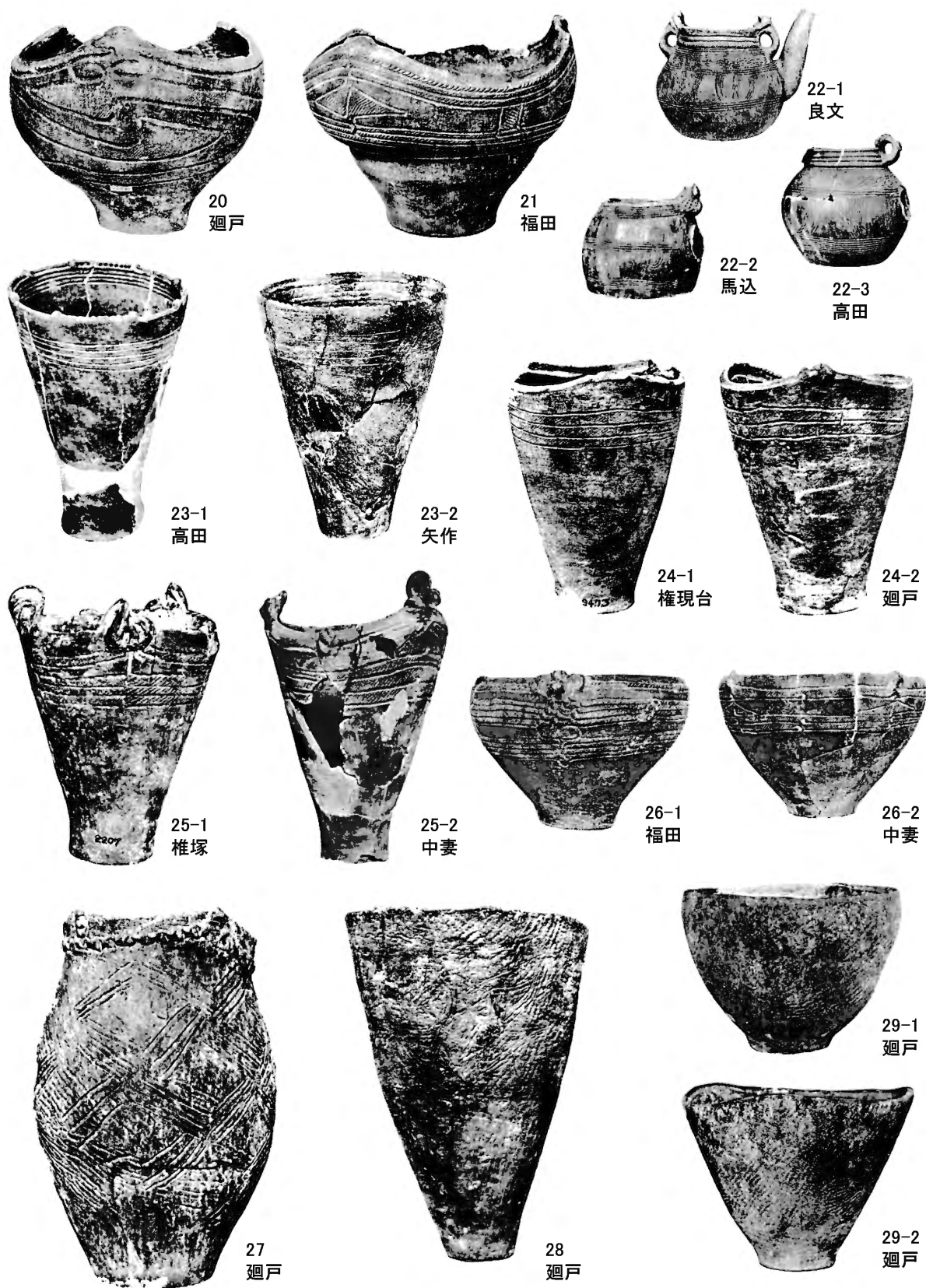
加曽利B 2式・加曽利B 3式の型式内容を概観すると、精製土器の変化に他地域との関係性が反映される一方で、粗製土器は地域ごとの伝統を維持しながら変容している姿が浮かび上がる。捉え返すなら精製土器は地域間の共時的な関係性を体現して広い分布域を持ち、粗製土器は地域ごとの通時的な系統性を表象して相対的に狭い分布域を示すのであり、両者が構成する土器型式は相反する関係性を二重の構造で表象しているのである。こうした土器文化が確立する背景には社会的・経済的な構造変化が存在するのだと考える。その変化を具体的に理解するには、土器の生産・流通・消費の解明に加え、土器以外の遺物・遺構・遺跡をも総合し、地域的にも広域な視野を持ってあたらねばならないであろうが、「加曽利B式」とはそれを要請する土器群なのである。

5 おわりに代えて

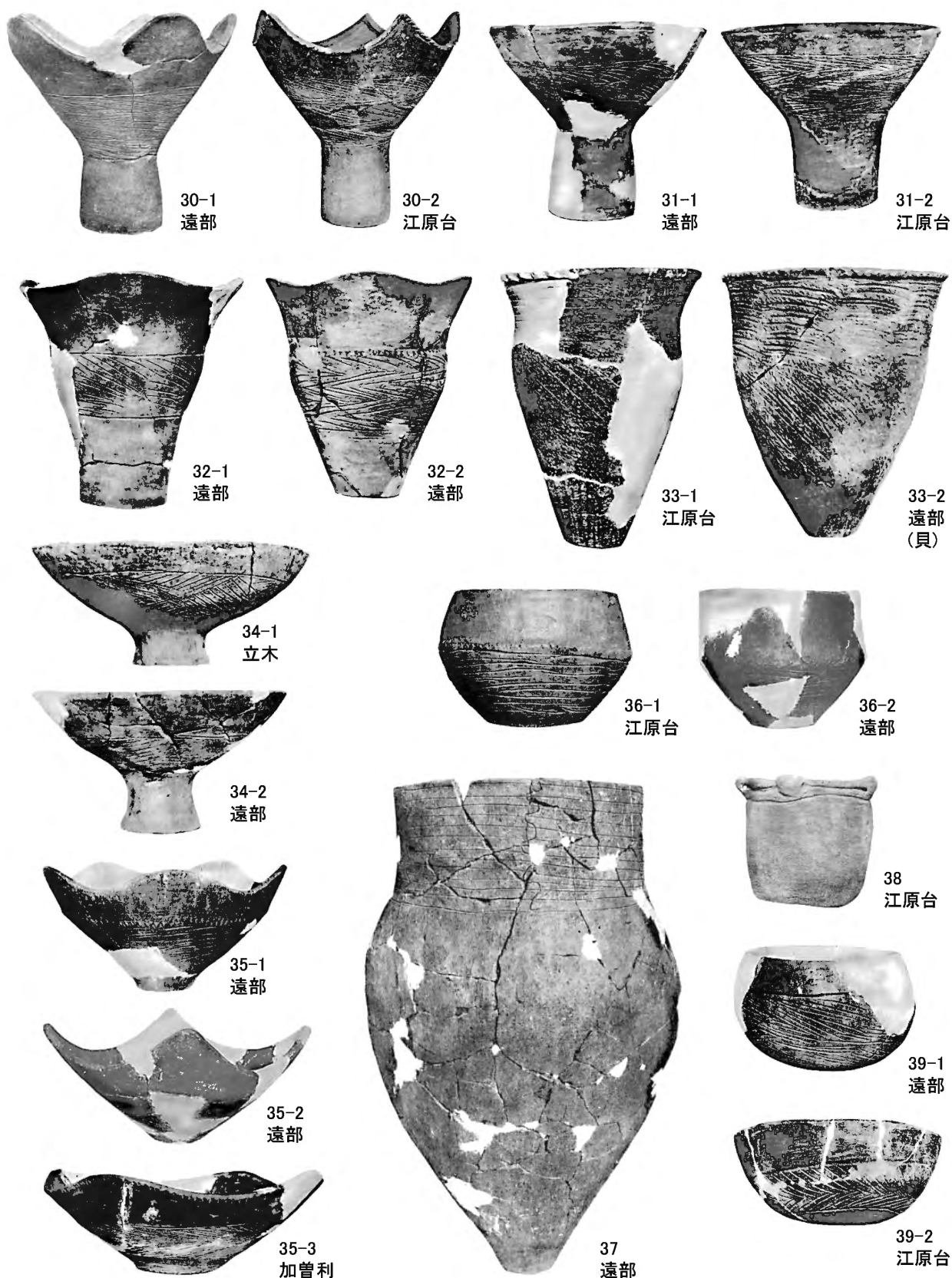
『図譜』という大小の虫喰いのあるテキストの一つの章を、使用可能な資料という観点から補って、想定した本来あるべき内容から現在の資料を捉え返してみた。そして現在の資料から、礎である『図譜』を捉え返すこともまた意味のある作業だと考える。（秋田 1994）指摘のように、第1図22－1～3を基準標本としての位置づけから外すことで、第1図の他の資料を生かしていくことになる。第2図では、当初から疑問符の付いていた遠部台遺跡貝塚の33－2は、原報告に照らしてやはり除外すべきであろう。更に同図30－2も斜線文の特徴から加曽利B 3式が疑われると指摘しておく。「曾谷式にも類例があり」とされた第3図60－1は第4図2と同じと思われるが、池上の報告では第一文化層の出土である。第8図15が極めて類似する点で西広貝塚58号住居址は広畑貝塚の再現と捉えられ、安行1式としてばかりか曾谷式の可能性も疑わしいことになる。これも基準資料から外すべきであろう。

「加曽利B式」の原点である加曽利貝塚の発掘が一昨年来行われている。今回調査地点は、集落終末期の解明を主目的としており、すぐに「加曽利B式」研究の深化につながるわけではないが、いずれは別地点を調査する機会があるだろう。原点中の原点は1924年のB地点にあるが、その場所が確定していないことを留意しておかねばならない。いわゆる型式学は仮説を構築するが、成否を証明するのは遺跡である。しかし遺跡の調査も、型式という概念なしには過去を照らしだすのは困難である。原点回帰も同一平面上なら単なるくりかえしに過ぎないが、捉え返しによる止揚によって視点を上昇させればより広い視野から俯瞰することになろう。特別史跡加曽利貝塚の今後の調査が、土器型式に限らず、あらゆる面でそうあることを願うものである。

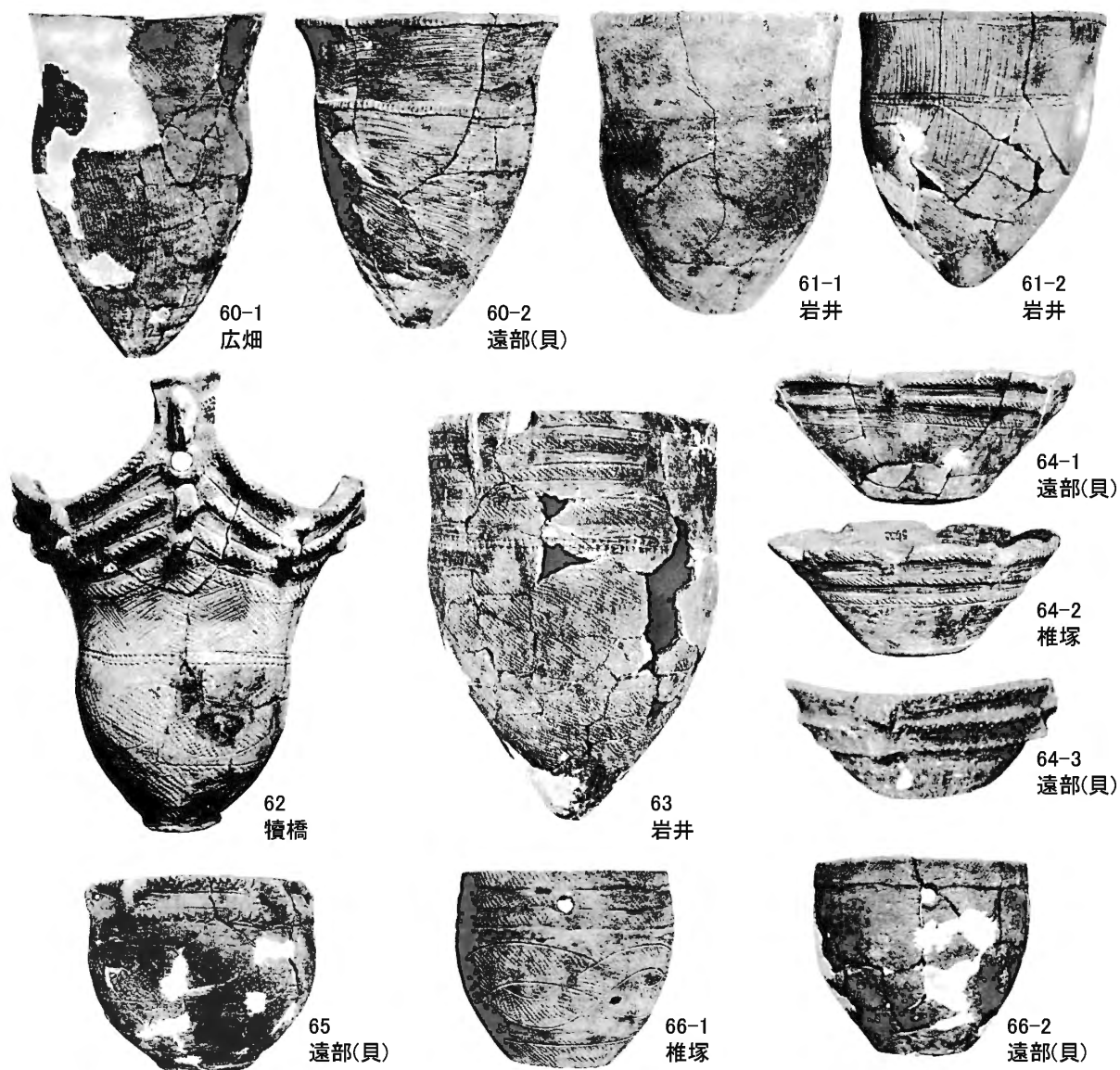
本稿挿図と引用文について付言する。第1図～第3図は、『日本先史土器図譜』第Ⅲ輯・第Ⅳ輯・第Ⅶ輯の図版で構成した。付した数字は図版番号－個体番号で、下段に遺跡名を示している。遠部台遺跡の場合（貝）とあるのは貝塚地点であ



第 1 図 『日本先史土器図譜』「加曾利 B 式（古い部分）」



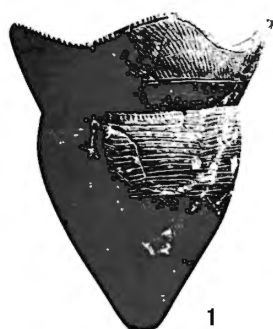
第2図 『日本先史土器図譜』「加曾利B式（中位の古さ）」



第 3 図 『日本先史土器図譜』「安行式土器前半」の安行 1 式

る。第 4 図と第 5 図は史前学雑誌の広畑貝塚報告（池上 1933）の巻頭図版と挿図から構成した。第 4 図左側は巻頭図版掲載土器 4 点を配し、報告本文の言及に従い個体番号を付した。右側上下は fig. 14・fig. 15 を配置した。第 5 図左側は報告の fig. 19・fig. 21 掲載土器を配列して個体番号を付し、右側は fig. 16・fig. 17 を配置した。第 6 図は（金子編 1998）掲載の土器から選択した。第 7 図は（縄文セミナーの会編 1996 a）掲載図、第 8 図・9 図は（菅谷 2012）掲載図を一部改変の上再録した。第 10 図は左から（岩手県埋蔵文化財センター 1982）・（大塚 1983）・（縄文セミナーの会 1996）・（菅谷 2017）掲載の図・写真で構成した。

引用文は旧字・旧かなを現用に改めた。誤植と思われる部分はそのままとした。



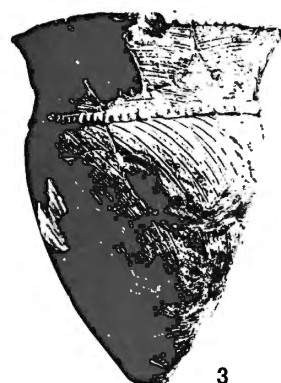
1



4



2



3

図版掲載土器

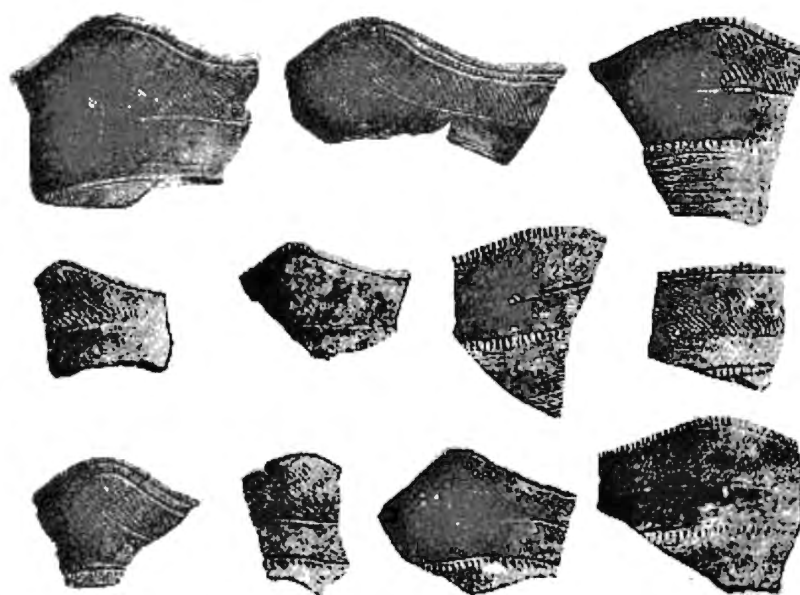


Fig.14 第一類土器

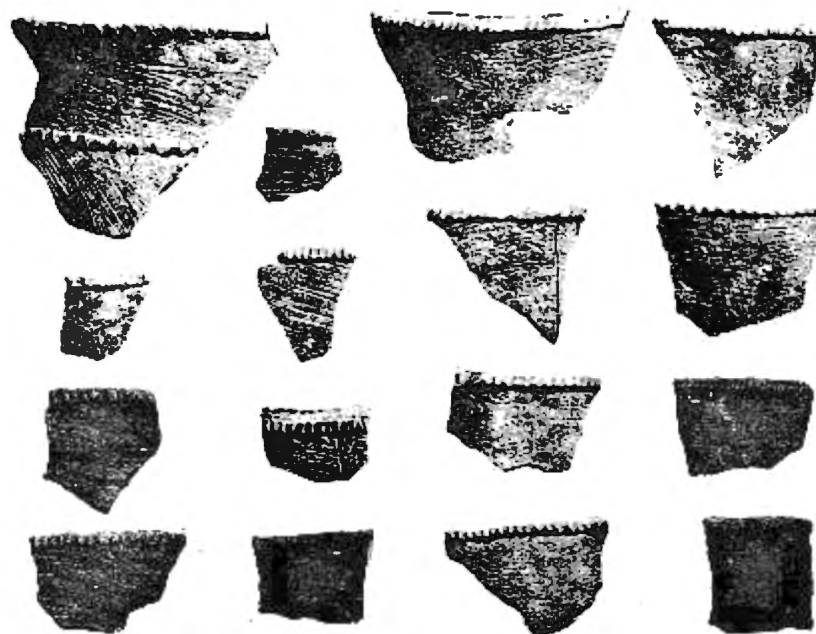


Fig.15 第二類土器

第4図 広畑貝塚の土器(1)



Fig.16 第三類土器

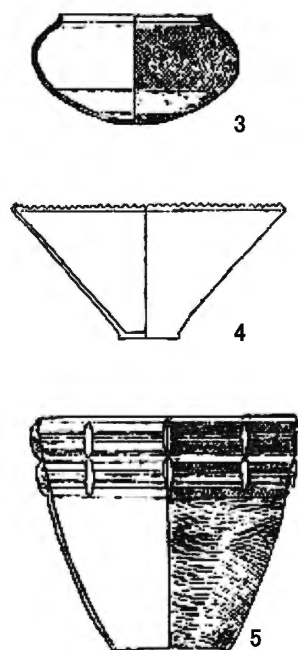
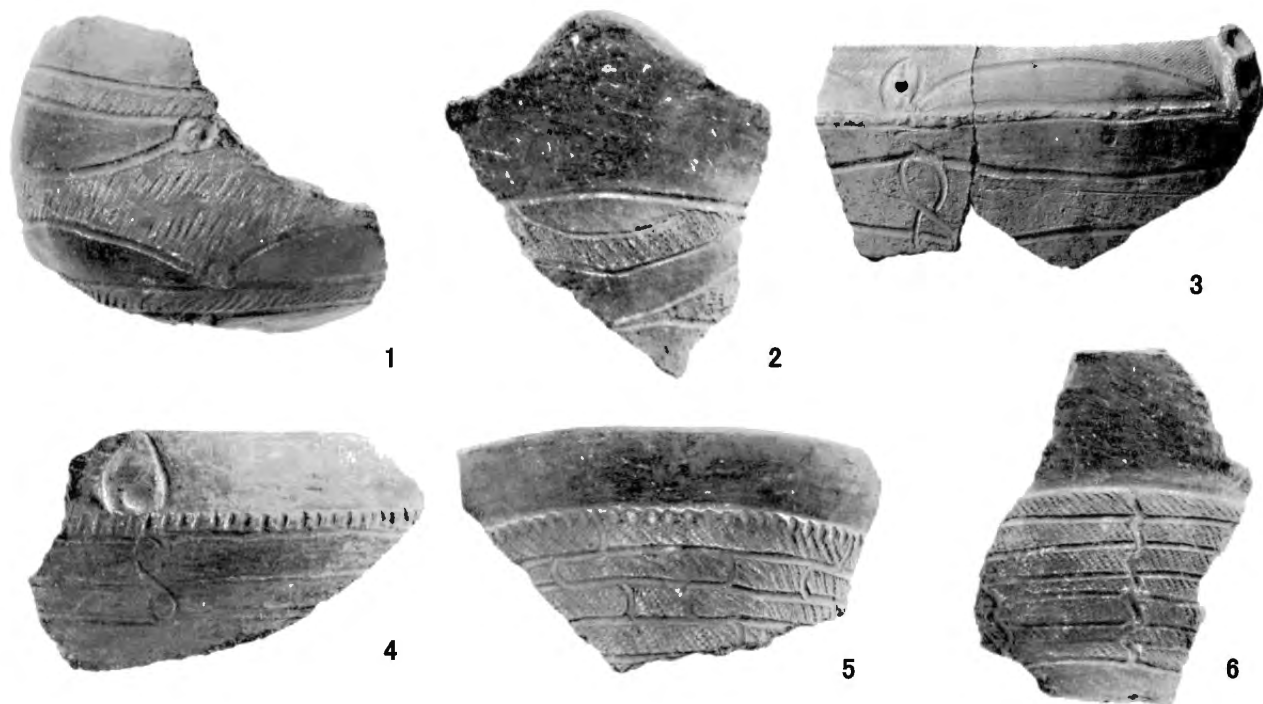


Fig.19・fig.21 掲載土器

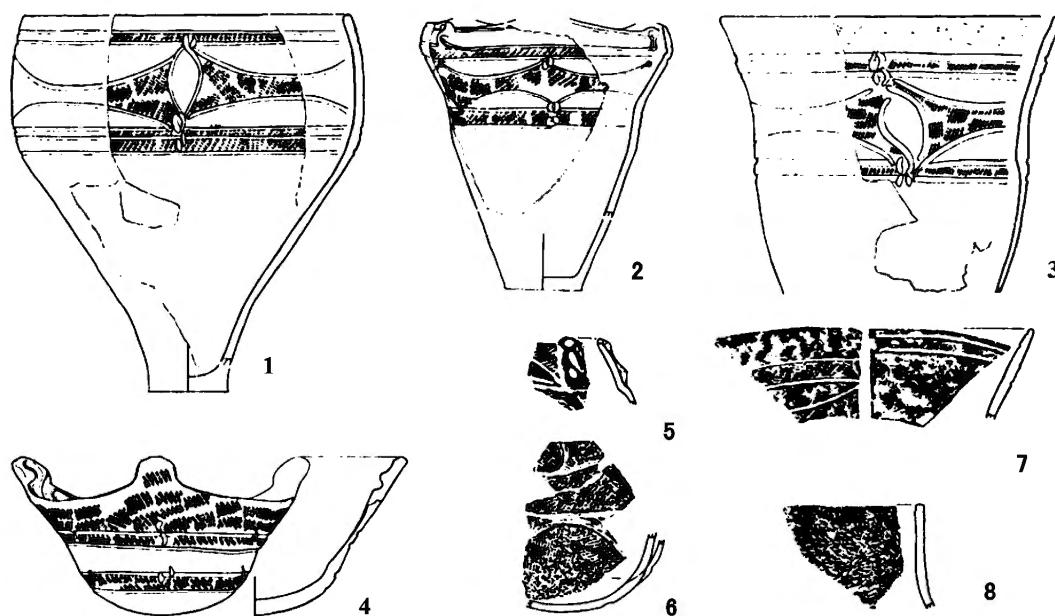


Fig.17 第四類土器

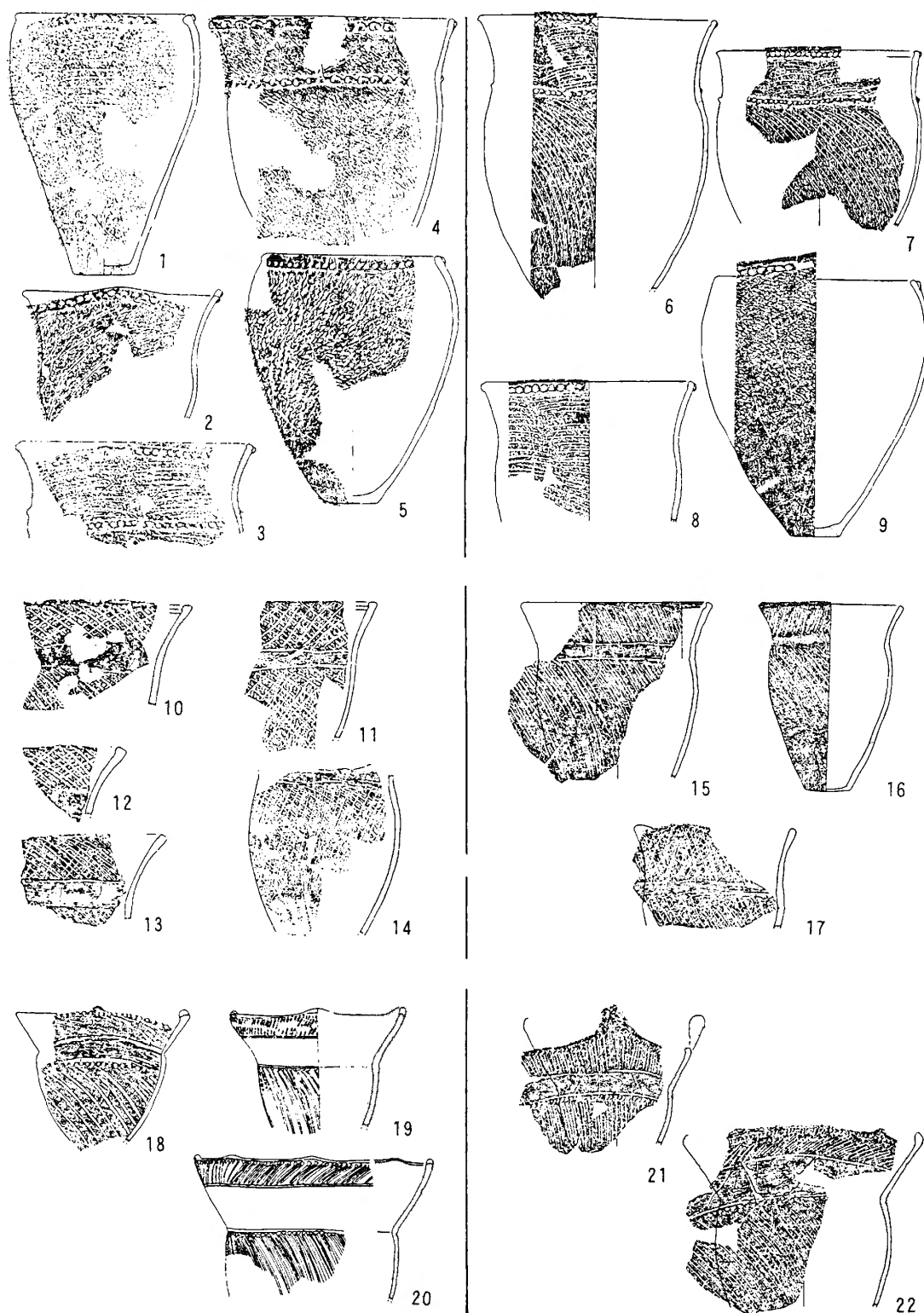
第 5 図 広畑貝塚の土器 (2)



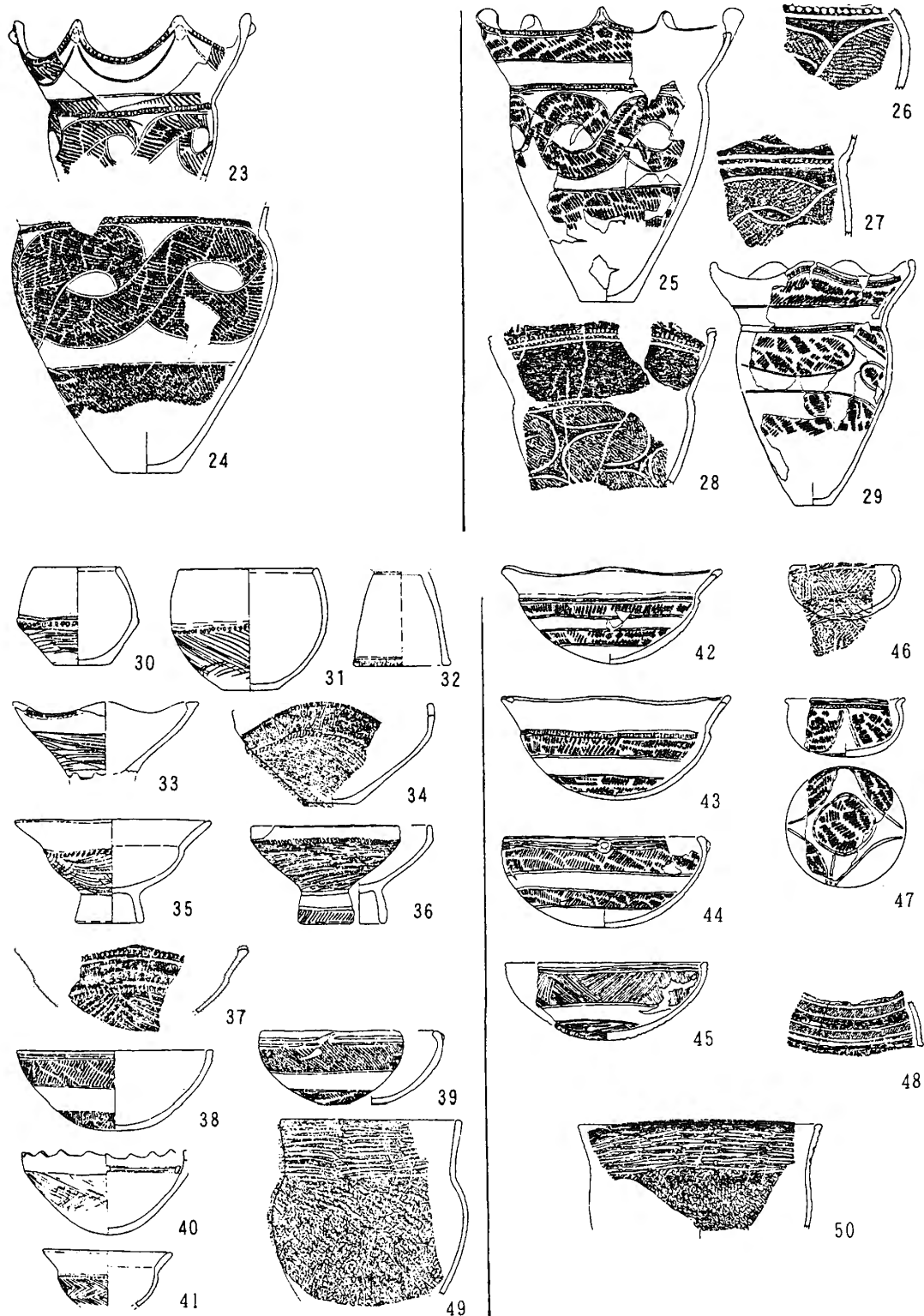
第6図 『日本先史土器図譜』未掲載の「加曾利B式」



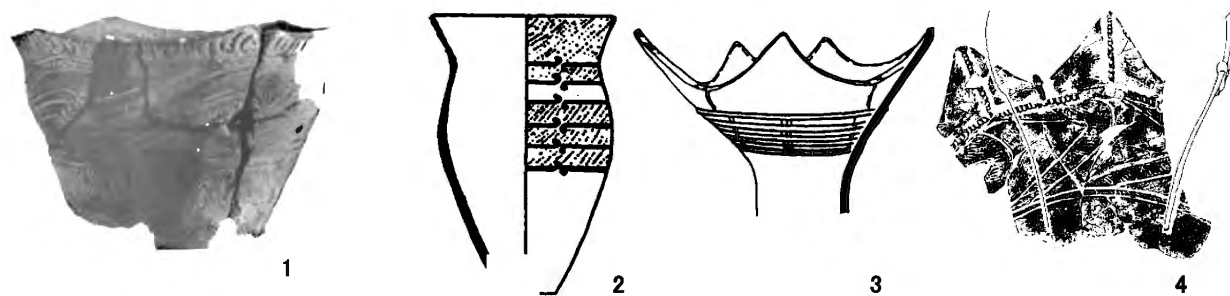
第7図 船橋市 古作貝塚2号 pit 出土土器



第 8 図 加曾利 B3 式の新段階・新段階 (1)



第9図 加曾利B3式の新段階・新段階（2）



第 10 図 東北地方の土器と東関東の土器

引用参考文献（編著者名 発表年順）

- 秋田かな子 1994 「加曾利 B 1 式注口土器の成立（予察）－王子ノ台遺跡出土の注口土器から－」『東海大学校地内遺跡調査団報告 4』
- 秋田かな子 1998 「加曾利 B 1 式土器の構造変化とシステム－南関東西部における様相をふまえて－」東海史学 32 号
- 秋田かな子 2008 「加曾利 B 式」小林達雄編『縄文土器総覧』アム・プロモーション
- E.S. モース著 近藤義郎・佐原真編訳 1987『大森貝塚』岩波文庫
- 池上啓介 1933 「広畑貝塚」史前学雑誌 5 卷 5 号 史前学会
- 池上啓介 1937 「千葉県印旛郡臼井町遠部石器時代遺跡の遺物」史前学雑誌 9 卷 3 号 史前学会
- 岩手県埋蔵文化財センター 1982『盛岡市 萩内遺跡（Ⅲ）』岩手県教育委員会
- 大塚達郎 1983 「縄文時代後期加曾利 B 式土器の研究（1）」東京大学文学部考古学研究室研究紀要第 2 号
- 大塚達郎 1995 「安行 3a 式土器型式構造論基礎考」縄文時代 6 号
- 大町四郎・片倉修 1937 「下総岩井貝塚－特に安行式土器に就いて」先史考古学 1 卷 1 号 先史考古学会
- 大山史前学研究所 1937 「千葉県千葉郡都村加曾利貝塚調査報告」『史前学雑誌』9 卷 1 号 史前学会
- 金子裕之編 1998『縄文後期加曾利 B 式・中国地方の陶棺・下総国分寺・尼寺資料 山内考古資料 9』奈良国立文化財研究所
- 斎藤弘道 1996 「茨城・栃木両県における後期中葉の土器様相」『第 9 回縄文セミナー後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 縄文セミナーの会編 1996 a『第 9 回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』
- 縄文セミナーの会編 1996 b『第 9 回縄文セミナー 後期中葉の諸様相－記録集－』
- 菅谷通保 2000 「遠部台遺跡・江原台遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古 1』千葉県
- 菅谷通保 2012 「東関東から見た西関東・中部の後期後葉土器群の位置付け」『第 25 回縄文セミナー 縄文後期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会
- 鈴木正博・鈴木加津子 1980 「加曾利 B 2 式精製土器様式（概説）」・「加曾利 B 3 式精製土器様式（概説）」『大田区史（資料編）考古Ⅱ』東京都大田区
- 鈴木正博 1981 「遺物特論Ⅱ－「加曾利 B 式（古）」研究序説－」『取手と先史文化－中妻貝塚の研究－下巻』取手市
- 山内清男 1939～1941『日本先史土器図譜』先史考古学会（1967 年再刊による）
- 山内清男 1964 「縄紋式研究史における茨城県遺跡の役割」茨城県史研究 4 号 茨城県史編さん委員会